〔名品展によせて〕

重要文化財　青磁九竜淨瓶　高麗時代

— 高33.5センチ　胴径12.5センチ —

今春、当館所蔵の青磁九竜浄瓶が国から重要文化財の指定を受けました。これで当館所蔵の指定及び認定文化財は、国宝4件、重要文化財27件、そして重要美術品11件となりました。この欄ではこの世界的な名品についてご紹介しましょう。

高麗時代(918～1392) には、朝鮮の陶磁工芸を代表するすぐれた青磁が焼かれました。それは初め中国の技術を学んだものでしたが、12世紀初頭にはすでに高度の発達をとげ、独特の奥深い色あいの青磁が作られるようになりました。また、青磁に象嵌の技法を用いて精緻な文様を表わすことは、朝鮮独自の方法と言えます。いま、本国や日本をはじめとする世界各地のコレクションには、多くの高麗青磁が伝わっていますが、そのうちどれを最高の名品とするかについては、議論がわかれることでしょう。しかし、どれが最も精巧かといえば、まずこの青磁九竜浄瓶をあげねばならないでしょう。

この青磁器は仏教儀式に使用する浄瓶（じょうへい）の一種で、高麗青磁の最盛期である12世紀の前半に作られました。首、肩、注口には9箇の竜首が配され、胴部にはそれらの竜身が浮彫りされています。この奇抜な形は他に類例のない彫刻的技巧を極めたもので竜の眼がこまかい鉄釉象嵌で表わされ、歯、牙、角、舌、耳まで精巧に作られていることには、驚くほかはありません。釈迦が誕生したとき、九竜の竜が口から水を吐いて釈迦の体を洗ったという「九竜吐水」伝説がありますが、この造形はおそらくその伝説にちなんでいるのでしょう。高麗時代は特に仏教がさかんでしたが、この浄瓶は当時の人びとのひたすらな信仰を表わしています。

この青磁九竜浄瓶は朝鮮半島南部の全羅南道康津郡の古墓から出土したものですが、その附近一帯には青磁を焼いた多くの高麗時代の窯がありました。出土したとき浄瓶には承盤（受け皿）が備わっており、それには浄瓶の胴部に見るような竜の浮彫りがあったそうです。この浄瓶のすばらしい技巧を思うとき、いまは行方不明となっている承盤もきっと精緻を極めた名品であったと想像されます。当館ではせめてその写真でも入手できたら、あるいは幸運に恵まれて浄瓶と承盤を再び一体のものとすることができたらと考えていますので、もしお心当りの方があれば、承盤の行方についてお知らせ下さるようお願いいたします。

（成瀬不二雄）

青磁九竜淨瓶　高麗

季刊 美のたより No.51
昭和55年 6月1日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.